



定家本『伊勢集』の一性格：
詞書「あるところに」をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-12-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 雄一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00016661

定家本『伊勢集』の一性格

——詞書「あるところに」をめぐって——

加藤 雄一

一、はじめに

古今集時代を代表する歌人の一人、伊勢の家集は、関根慶子・島田良二両氏の諸本研究¹⁾によって、もとは同一祖本であったものが、西本願寺本系統・群書類従本系統・歌仙家集本系統の三系統に分かれたものであると解明された。ただし、諸本間の異同は多岐にわたることから、本文の優劣は一概には決め難い。

にもかかわらず、ここ十数年の間に続けて公刊された『伊勢集』の注釈書は、西本願寺本を底本に用いている。それは、西本願寺本が天永三年(一一二二)の白河法皇六十賀の贈答品として書写されたものだともいわれ、諸本の中でも最古写本にあたるからだ。確かに「最古写本」という価値は揺るぎないが、後述する如く、それでさえも既に後人の手が加えられた本文であることは、伊勢の歌を読み解く上で留意せねばなるまい。

西本願寺本が重んじられる中、部分的にはあるが、歌仙家集本系統を用いて解説を試みるものもあつた。この歌仙家集本系統の原型は、天理大学付属図書館蔵本であり、定家が外題を書き、本文は側近の者たちが書写するという、定家晩年期に見られる書写活動によって生み出されたものである¹⁾。このことから、定家本系統とも称されることが多くなつてきた。

また、冷泉家時雨亭叢書の刊行²⁾によって、定家本系統には資經本と承空本の二本が加わり、諸本系統図にも新たな展開が見られるようになつてきた。

定家本についてはすでに片桐洋一氏が「ある部分では定家本系統の方が古いと思われても、別の部分では西本願寺本系統の方が古いと思われたりすることが一再ならずある」と、両者の古態性が容易には決着が図れないと言及はするものの、その著作の底本には定家本を選択されており、また、妹尾好信氏も「歌仙家集本系統の本文が歌物語として最も整った形態を有し

ており、本文的に案外すぐれているのではないかと思える」としておられるように、定家本を尊重する向きはあつた。

本稿は、定家本と西本願寺本との本文比較を行い、浮かび上がる現象を考察することで、定家本『伊勢集』の性格の一端を明らかにすることを目的としたものである。

二、西本願寺本と定家本の概観

まずはじめに、西本願寺本と定家本がいかなる本であるかを確認しておきたい。

『伊勢集』の構造について、関根慶子氏は、三系統それぞれには、

a 最も基本的な共通部分

b 共通増補部分

x 共通部分でありながら伊勢集以外の某

の三つの共通ブロックがあり、これを『伊勢集』の原型であるとされた。

しかし、最古写本である西本願寺本においても、既に祖本にあたる a の部分は完全ではなく、西本願寺本四六三〜四六七番歌の五首と、西本願寺本四八三番歌の一首は、本来、a の部分に存した歌であつたが、脱落が発生し、巻末に増補された歌で

ある。

一方、定家本は、西本願寺本が脱した二箇所（一）の歌を a の部分内にとどめており、その点においては西本願寺本よりも祖本に近い配列を残した本だといえる。

しかしながら、定家本も a の部分において、八首の脱落（西本願寺本三六〇〜三六七番歌に相当する歌で、増補はされていない）があることから、これもまた完全なる原初形態をとどめたものだとはいえない。

続けて、本文に関する具体的な例を見てみよう。

『伊勢集』の冒頭は、西本願寺本系統だけが「寛平みかどの御時、大宮す所ときこえける御つぼねに」で始まり、定家本を含む他の系統本は、「いづれの御時にかありけむ、おほみやすどころときこゆる御つぼねに」という書き出しになっている。どちらが原初形態であるかという問題について、先学の指摘を簡潔にまとめて示せば、『伊勢集』冒頭の、所謂「伊勢日記」の箇所において、「男・女」と実名を用いず、三人称で物語っていくことから、體化表現を用いた「いづれの御時にかありけむ」が本来の形ではなかつたかと推測され、そこに後人が、これは宇多天皇の御代の事であると施した注記が本文化し、現在の西本願寺本のような形になったという。

これと同様の事例がこの後にもすぐ見られる。伊勢の初恋の人といわれる仲平を「宮すどころの御せうと」とか「をと」と表現しておきながら、西本願寺本四番歌の詞書には突如として実名の「びはのおと」と書かれてある。これは、本来「をと」とあるべき所に「びはのおと」と注記していたものが次第に本文化したものだと考えられる。

定家本においても同様の事例が存在し、定家本五番歌の詞書では「おと」と書き出しながら、歌の前には「びはのおと」と作者名のように記されている。これはまさしく歌の作者名を注記したものが本文化した結果であることがよくわかる例だといえよう。

これらの事実から、どちらの本にも多かれ少なかれ後人の手が加えられ、新しい部分と古い部分が混在していることは理解できるだろう。

三、醍醐寺五重塔初層天井板に書かれた伊勢の歌

あふことのあけぬながらに
あけぬればわれこそかへれこゝろ
やはゆく

この歌は、天曆五年（九五）に創建された醍醐寺五重塔初

層天井板に書き残された判読可能な和歌六首の中の一首である。

伊東卓治氏の調査報告⁽¹⁰⁾によれば、創建当時、絵や区画線を実施す画工等が、口ずさんでいたであろう歌を書き記したものだといふ。そしてこの歌が、『伊勢集』に入集する、所謂四季恋物語屏風歌群（定家本三四〜五〇番歌）の最後の歌であると指摘された。

ちなみに、この四季恋物語屏風歌とは、寛平八年（八九六）六月から、同九年（八九七）年七月までの間に、中宮温子の命によつて、伊勢が、男女の恋の贈答歌を、季節を追いながら物語風に詠んだ一連のものをさす。

その最後の歌が、定家本では五〇番歌、

あふことのあけぬながら
あけぬればわれこそかへれ心や
はゆく

で、西本願寺本では五一番歌、

あふことのあけぬながら
あけぬれば我こそかへれこゝろ
やはゆく

である。

第二句目は、「あけぬながらに」、「あはぬながらに」、「あけぬよながら」、「あはぬよながら」と、四つの形が見られるが、

同一歌と認めてよいだろう。

また、天井板に書かれた歌の二句目、「あけぬ」の「け」の右横に「は」と傍記されている点について、伊東氏は、別筆で「は」と書かれているのは、最初に書かれたものを訂正するつもりで書いたのだろうと推測された。だが、目的はどうであれ、「あけぬ」に対して後で書かれた傍記であることは確かであり、西本願寺本の「あはぬ」よりも、定家本の「あけぬ」とある本文の方が古いとだけはいえるだろう。

そこで今度は、「あけぬ」と「あはぬ」を、表現の側面から検討しておきたい。

西本願寺本の本文で読んでみると、「逢うこと」が「逢わな夜」というように、そのまま訳しただけではわかりにくい表現となっている。「あなたに逢うことができなかつた夜」と言いたいのだろうが、同じ動詞を繰り返して、回りくどい表現といわざるを得ない。現行の注釈書でも、

今夜逢うことができるはずだったのに、こんなことで逢えないままに夜があけてしまいましたから 『伊勢集全釈』
逢うはずだった夜は逢えないまま、明けてしまったので

『和歌文学大系18』

て、一応の解釈を試みている。

一方、定家本においても、片桐氏は、「あけぬ」にしろ、「あはぬ」にしろ、意味が明解ではないことを述べられ、

「あふことの」と「あ（ぬ夜ながら）」とのつながりが悪く、意が通じない。いささか大胆な改訂ながら「あかぬ夜」（満足できない夜）と読んでみた

と、新たな解釈を提示された。それほどまでに、本文に即して訳出することが難しいことを思わせる。

実は、この歌は、
(題しらず)

伊勢

あふことのあけぬよながらあけぬればわれこそかへれこころやはゆく (恋三・一六八)

のように、定家本の本文の形で、『新古今集』に採歌されている。『新古今集』の注釈書では、

戸も開けてもらえず、逢うことのかなわな夜のみまで 『日本古典文学全集』 新古今和歌集

戸も開かず、逢うこともかなわぬままに夜は明けてしまつたので 『新古今和歌集全注釈』

というように訳出されており、「あふこと」の「と」に「戸」を響かせ、二句目の「あけ」には、夜が「明く」と、戸が「開

く」を掛けたものだど理解されている。右の訳出例はこなれたものではあるが、本文に即して訳せば、「逢うために戸を開けてくれない、そんな夜のまま、この夜が明けてしまったので」となるだろう。

よつて、定家本の本文の方が、言葉を補ったり、校訂をしたりせず、解釈ができ、本文としては優れているのではないかと考えられる。

加えて、この屏風歌の構成については、既に先学⁽¹⁴⁾により物語的に構成されたものだど指摘がなされているが、その最後を飾る歌としての役割を考えるならば、「戸を開けてはくれない」という内容を詠み込んでいる可能性が大きいとはいえないだろうか。先述したように、この屏風歌は、四季折々の場面で男女が恋歌の贈答を繰り返して進行する、物語仕立ての屏風歌である。見初めた女に男は言い寄るが、女は切り返しの歌で応酬するという、恋歌の贈答における女歌の基本的作法に従い詠出されていく⁽¹⁵⁾となれば、話の展開も、最後に男がやって来て、戸を叩き、入れてくれと懇願されたとしても、女はたやすく戸を開けたりはしない、というよく見られる話型の一つに則り作られているのではないだろうか⁽¹⁶⁾。

例えば、女が戸をあけてくれず、男は一晚中戸口で待つが、

そのまま夜が明けてしまふという発想の歌は、

こもりくの はつせのくにに さよばひに わがきたれば
たなぐもり ゆきはふりく さぐもり あめはふり
くのつとり きぎしはとよむ いへつとり かけもな
く さよはあけ このよはあけぬ ிரりてかつねむ この
とひらかせ (万葉集・卷十三・三三二〇)

のように『万葉集』にも既に見られる。それに加え、夜が明け、男は帰るといふ伊勢歌と同じ状況を詠んだものとして、

おなじころいきてたゞくにあけねば、おとこ
しのゝめのあけざりしかば夜もすがらまきのとよりは立帰
りにし (信明集I・一〇五)

のような、信明が中務に贈った歌などがある。

このように「戸」を開けるか否かは、女が男を受け入れるか否かの意志表示でもある。だから、最後の歌は、女に戸を開けてはもらえず拒絶されてしまったという男歌で終わるのがふさわしいのではないかと考えられる。

このような点からも、西本願寺本の本文より、定家本の本文の方がより適した表現がなされていると思えるのである。

以上の考察から、定家本の内部にも、天曆期にまで遡ることが可能な和歌本文が残されていることがわかり、定家本で伊勢

の歌を読解していくことの意義が理解される事例の一つだといえるだろう。

四、詞書「あるところに」について

さて、定家本と西本願寺本を比べながら読み進めていくと、定家本のみ、三箇所「あるところに」という詞書が現れることに気づく。

あるところに、またの宮の御もぎのうたども、たけおほかる所

①としごとにおひそふたけのよゝをへてかはらぬいろをたれとかは見む (七五)

あるところに、こせちのころ、ほりかはどのにびはのおととおはしまして、たゞしのびやかに、とあるに

②やをとめにをみのころものきながらになれぬほどをばたれかしのばむ (一〇七)

あるところに、みかどふたりおはしましけるとか

③日のひかりかさねてさせばむらさきのくもゝふたへにいまやなるらむ (二一四)

この三つの「あるところに」は、他系統には一切出現するところがない。また、これらの詞書は、「あるところに」と、それ

に続く内容とが噛み合っているとは言い難く、違和感がある。そのうちの一つ、①の「あるところに」に関しては、既に山口博氏¹⁷⁾が

同本他の屏風歌には「ある所」などと漠然とした言い方はない。

と述べた上で、

詞書表現の異常を再考すると、あの部分は、「ある所に、北宮の御裳着の歌ども」で、「ある所」は「ある本に」の意で、「ども」ではなく「とも」であって、本来は書写者の注であったと考えられる。それが本文に竄入したものである。

と、「詞書表現の異常」を指摘された。山口氏も、「あるところに」が下に続かないことを感じられてのことであろうが、「あるところに」を「ある本に」という意味で用いた例は見当たらず、従えない。一方、注釈書類は西本願寺本を底本としているため、この詞書に関して、詳説には及んでいない。そこで、詞書「あるところに」は、どのような意味を有し用いられているのか、また、他系統には見られず、定家本にだけ出現するのは何故なのか、考察する必要があるだろう。

まずここでは、詞書「あるところに」の持つ意味を考察して

いくこととする。

詞書の中に出現する「あるところ」の用例を調べてみると、例えば、『後撰集』には、

ある所に近江といひける人のもとにつかはしける

(よみ人しらす)

しほみたぬうみときけばや世とともにみるめなくして年の
へぬらん
(後撰集・恋二・五二八)

という例がある。『新日本古典文学大系6 後撰和歌集』の脚注には、

○ある所に……さる貴族のもとにいる近江という女房。

とある。これは、「あるところ」が、その場所が高貴な場所であると説明されたものである。また、同様に、

あるところにまつむしすゝ虫などとりいれてやり侍し

万代の秋をまちつゝ聞わたれ岩ほにねざす松むしの声

(元輔集II・九四)

においても、『元輔集注釈』の中で「あるところ」について、「多くの場合、高貴な家を指しているようである。」と説明されている。

そこで、「ところ」の語義を辞書で確認してみると、例えば『角川古語大辞典』では「助教詞」とし、「貴人を教えるのいう」とある。その他の辞書も同様に説明がなされている。

なるほど、

御子二ところおはするを、またもけしきばみたまひて

(源氏物語・若菜下)

姫君二ところうち語らひて、いといたう屈じたまへり。

(源氏物語・竹河)

のように、「二ところ」という表現が、「貴人二人」を意味する理由が理解できる。

これらのことから、「あるところ」には、「ある高貴な場所に・ある高貴な方に」という意味を有し、敬意表現として用いられていることが確認できた。

この点を踏まえて、次の詞書をみてみたい。

とりのこのやうなるうりを、ある所にたてまつるとて

わがきみのますべきちよのしるしにはつるのこにこそうり

もなりけれ
(恵慶集・八四)

八重やまぶきをおりて、ある所にたてまつれたるに、

ひとへの花のちりのこれををこそせ給へり

おりからをひとへにめづる花の色はうすきをみつゝうすき

ともみず
(紫式部集II・五二)

このように、「あるところ」は「奉る」という謙譲の動詞とともに用いられた例が散見される。これは「あるところ」が

「高貴な人・場所」を指す語であるのだから、「献上する・差し上げる」を意味する「奉る」とともに用いられるのは当然なことであろう。

ではこれが、「ところ」ではなく、「人に」や「女に」の場合はどうであろうか。その大部分は、

こしのかたなる人にやる

思ひやるこしのしら山しらねどもひと夜も夢にこえぬよぞなき
(貧之集一・七七九)

ある人につかはし、

うしといひて世をひたすらにそむかねば物思ひしらぬ身とや成なん
(元輔集二・二一四)

女につかはしける

たのむ木もかれはてぬれば神な月時雨にのみもぬるるころかな
(後撰集・冬・四五二)

のように、「やる」や「つかはす」が用いられ、「奉る」を用いた例は殆どない。また、「人に」や「女に」の場合、

ある人に

あだなりとおもひしかども君よりはものわすれせぬそでのうへの露
(道信集一・五七)

ある女に

うつりがのうすく成ぬるたき物のくゆる思ひにきえぞしぬべき
(元輔集二・二三八)

のように、「やる・つかはす」を書かずとも、暗黙のうちにその意味が込められている詞書もある。

このような用例を踏まえて、次の詞書をみてみよう。「あるところに」は、「ある人に」「ある女に」のように、単独で用いた例はないのだが、例えば、

ある所にはじめて

いかにしていかにうちいでむかゝりとはなべてのことになりぬべきかな
(道信集一・三七)

は、『道信集注釈』では、「ある所に初めて贈った歌」と訳出されており、「ある所に」「つかはす」という意味が込められたものだと認識されていることがわかる。注釈書では、その相手を明確にしていけないのだが、「あるところに」と記していることから、ある程度の身分の人物を想定してもよいのかもしれない。また、

ある所に、よぶかき月をみはべりて

よゝをへてあづさのそまにいろ月のかげまとなるあきのそらかな
(能宣集一・四六)

は、『能宣集注釈』では、「ある所で、夜深いころの月を見まし

て」と解釈されているが、やはりここも、「高貴な人のもとに夜深き頃に月を見まして、(それをきつかけにして詠んで)差し上げた歌」と解釈してよいかと思われる。

以上の考察から「あるところに」という表現は、「ある人に」の敬意表現としての役割を担っているものだとと言えるだろう。これらの考察に基づき、『伊勢集』の詞書の検証に移りたい。

五、詞書「あるところに」の検証(一)

では、定家本だけに見られる詞書「あるところに」を一つ一つ検証していくことにしよう。まずは①の例から検討する。

定家本では、最初の「おふるより」「たのみつゝ」の二首が、亭子院六十御賀の屏風歌、三首目「としごと」は北の宮の装着的屏風歌、三首はさんで最後の二首「いにしへの」「ねをたえて」が再び北の宮の装着的屏風歌である。西本願寺本では、最初の三首「ふたばより」「たのみつゝ」「としごと」が亭子院六十御賀の屏風歌、次の「いにしへの」から続く五首が北の宮の装着的屏風歌のように見えている。

このように、亭子院六十御賀の屏風歌の冒頭二首は共通しているが、それに続く、定家本七五番歌と西本願寺本七六番歌に当たる「としごと」の歌においては、「竹おほかるところ」

という詞書のみが共通している。ということは、この歌にもともと付されていた詞書は「竹おほかるところ」だけであったことを思わせる。すなわち、

たけおほかる所

としごとにおひそふたけのよゝをへてかはらぬいろをたれとかは見む

とだけ書かれた詠草類が単独で存在していたと考えられる。おそらく、定家本においては、亭子院六十御賀の屏風歌としてまとめられた当初の和歌資料ではなく、全く別の次元の単独和歌資料として手元に残っていた歌だったのでないだろうか。実は、この歌は【表一】²³⁾の備考にも示したように、

(延長四年九月法皇の御六十賀、京ごくのみやすどころのつかうまつり給ふときの御屏風のうた十一首) たけ年ごとにおひそふ竹のよゝをへてたえせぬ色を誰とかはみん
(貫之集一・一九八)

のように、『貫之集』にも亭子院六十御賀の屏風歌として収められている。つまり、亭子院六十御賀の屏風歌として詠まれたことは間違いないが、歌の作者については、貫之と伊勢、両方の所伝があったということだろう。²³⁾そこで、屏風歌冒頭の「おふるより」「たのみつゝ」の二首とは別に伝わっていたため、

【表一】

	定家本	西本願寺本	備考
七三	亭子院の六十の宮すどころ のつかまつりたまふ御屏風のうたねの 日すの所まついとちぬさきあり おふるよりとさだまれるまつなればひさし きものたれか見さらむ	亭子院六十御賀、京極の宮す所つかうま つりたまふ御屏風の歌、子日したるとこ ろ、松のいとちぬさきに ふたばよりとさだまれるまつなればひさし き物とたれかみさらん	「貫之集」・一九八 「延長四年九月法皇の御六十賀、京ごくの みやすどころのつかうまつり給ふときの御屏風のう た十一首、たけ、四句「たえせぬ色を」
七四	まつにふちかゝれり たのみつつかゝれるふちはまつのきのちよて ふこともあかずぞありける	松にふちかゝれるところ たのみつつかゝれるふちはまつのきのちよて ふこともあかずぞありける	「中務集」・六七 まつのしたにみづやれり」
七五	あるところに きたの宮の御もぎのうた ともしごとにおひそふたけのよゝをへてかはら ぬいろをたれとかは見む	竹おほかるところ ともしごとにおひそふたけのよゝをへてかはら ぬいろをたれとかはみむ きたの宮の御もたてまつるに、かむのお つりたまふかぎり いにしへのころもたえずゆくみづにわがま つ影もけふこそはみれ うきくさ、ふねにてとるところ ねをたえてみづにとまれるうき草はいけのふ かさをとのむなりけり	「和漢朗詠集」・二八一・清慎公 「教忠集」・一四五 「女座花」
七六	をみなへしをりみて、すゞりのうへに おけるを見て をみなへしみるに心はなぐさまでいとむか しの秋ぞこひしき	をみなへしをりたるところ をみなへしみるに心はなぐさまでいとむか しの秋ぞこひしき	「中務集」・六四 「調書」がぐら」
七七	かりする人、あ中のいへのたなど、ちか かまへなるによりきたり かりにくとさきに心は見えぬればわがたもと にはよせじとぞおもふ	ちかくよりきたれば かりにくといふにころのみえぬればわがた もとにはよせじとぞおもふ	「中務集」・六四 「調書」がぐら」
七八	かぐらす所 としごとに神をぞいのるさかきばのいろもか はらでやらむとおもへば	としごとに神をぞいのるさかきばのいろもか はらでをらんとおもへば	「中務集」・六四 「調書」がぐら」
七九	きたのみやのもきたまふに、院、そのお とゞのおくり物に、御屏風わか、たて まつれるかぎり いにしへの心したえずゆく水にわがまつかけ もけふこそは見れ うきくさ、ふねにてとるところ ねをたえてみづにうきたるうきくさはいけの ふかさをたのむなりけり	竹おほかるところ ともしごとにおひそふたけのよゝをへてかはら ぬいろをたれとかはみむ きたの宮の御もたてまつるに、かむのお つりたまふかぎり いにしへのころもたえずゆくみづにわがま つ影もけふこそはみれ うきくさ、ふねにてとるところ ねをたえてみづにとまれるうき草はいけのふ かさをとのむなりけり	「中務集」・六四 「調書」がぐら」
八〇	をみなへしをりみて、すゞりのうへに おけるを見て をみなへしみるに心はなぐさまでいとむか しの秋ぞこひしき	をみなへしをりたるところ をみなへしみるに心はなぐさまでいとむか しの秋ぞこひしき	「中務集」・六四 「調書」がぐら」

あるところに

たけおほかる所

としごとにおひそふたけのよゝをへてかはらぬいろをたれとかは見む

のように、単独で存在した和歌資料に「あるところに」を書き足して『伊勢集』には収められたものとはいえないだろうか。

ちなみに、この歌の後続歌を検討してみると、定家本七六番歌は、「女郎花を見ると心は慰められず、ますます昔の秋を恋しく思う」と詠まれている。西本願寺本ではこれを「北の宮の装束の屏風歌」の一つとして読ませるが、その内容からして装束の祝いの歌としてそぐわないことは、既に『伊勢集全釈』においても、

たしかに、「見るに心はなぐさまでいとどむかしの秋ぞこひしき」と詠まれた歌の情は、屏風歌らしからず悲哀・回顧に傾いており、なにか事情を異にする一首が、ここに混入したのであつたかもしれない。

と指摘がなされている。よって、定家本の詞書のように祝賀の歌とは一線を画した単独の和歌資料ではなかったかと考えられる。

更には、続く定家本七七・七八番歌も【表一】の備考に示したように、他の家集にも重出する歌であることを考慮すれば、もともと一首一首単独の和歌資料が並べられ形成された歌群ではなかったかと思われる。

次に「あるところに」に続く「きたの宮の御もぎのうたども」という詞書について検討しておきたい。

別系統の本では、定家本七五番のあとには「北の宮の装束の歌」が続いていることから、定家本七五番歌の余白部分に、「北の宮の装束の歌がこのあとに何首か続く」という意図の注を施したのではないだろうか。そして書写を重ねていくうちに、次第に七五番歌の詞書に混入してしまい、現行の形になつたと推察される。

まとめると、定家本においては北の宮の装束の歌が存在しなかったが故に、ある段階において、七五番歌には注記の混入が起き、また、ある段階において歌の補入が行われ、西本願寺本とは異なる配列を見せるに至つたといえるだろう。結果として、そのことにより、西本願寺本だけを読んでいると、七七番から八一番までの五首がまるで北の宮の装束の歌として見えてしまうが、実はそうではない歌であることを、定家本は指し示してくれているのである。

六、詞書「あるところに」の検討(二)

次に②の定家本一〇七番歌について考察してみよう。

西本願寺本一〇六番歌「山ざくら」から続く四首は「春日歌合時」という詞書で一括され、春日歌合の歌群を形成するが、定家本では一〇五番歌「さくらばな」と、次の「ぬれつゝも」

に詠まれた歌であることを示唆している。確かに、「あるところに」という詞書が付された定家本一〇七番歌は、『表2』の備考に示したように、『京極御息所歌合』の本文中には見出せない。その原因を『伊勢集全釈』では、

「この一首は、現存する『春日歌合』(京極御息所歌合)の本文中には存在しない。ただし、同歌合の一番本歌には「めづらしきけふの春日の八少女を神も恋しとしのばさら

」だけ春日歌合の歌であって、一〇七番歌「やをとめに」と、一〇九番歌「みそめずは」には単独の詞書が付され、別の機会

【表2】

定家本	西本願寺本	備考
一〇五 かすがのうたあはせのころ さくらばなちりてみゆきにまがひなばいづ れの花とはるにとはなむ	一〇六 春日歌合時 山ざくらちりてみゆきにまがひなばいづれ かはなとはるにとはなむ	『京極御息所歌合』・五九・伊勢 詞書「左」、初句「やまざくら」、四句「いづれ かはなと」
一〇六 ぬれつゝもあめにはゆかむまつ風はちとせ のはるをもちさくらなむ	一〇七 ぬれつゝもあめにはゆかむまつかさとはち せのはるをもちさくらなむ	『京極御息所歌合』・四四・作者名ナシ 詞書「左勝」、三句「まつかさの」
一〇七 あるところに、こせちのころ、ほりか はどのに、びはのおと、おはしまし て、たらしのびやかに、とあるに やをとめにをみのころもきながらになれ ぬほどをばたれかしのばむ	一〇八 やをとめのをみのころもをきながらになれ ぬほどをばたれかしのばむ	『拾遺集』・二九八・伊勢 詞書「かがみいさせ侍りけるうらに、つるのかたを いつけさせ侍りて」
一〇八 かゞみのうらにつるのかたをいつけて 侍りければ ちとせともなにかいのらむうらにすむたづ のうへぞ見るべかりける	(ナシ)	
一〇九 ふるいゑにあからさまにいきて みそめずはあらしものをふるさとのはな に心のとまりぬるかな	一〇九 みそめずはあらし物をふるさとの花に心 のうつりぬるかな	『京極御息所歌合』・一五・作者名ナシ 詞書「右勝」、初句「見そめずも」、結句「うつ りぬるかな」

めや」があり、これに対して「八少女を神ししのばば木綿
棒かけてぞ恋ひむけふの暮れなば」と「ちはやぶる神し許
さば春日野にたつ八少女のいつかたゆべき」が返歌として
番わされている。本集のこの歌は、あるいはその選外歌で
あつたか。

と考察されており、諸注の見解も大方一致している。

そこでまずは定家本一〇七番歌の「あるところに」から検討
してみたい。

「あるところに」に続く「ほりかはどの」とは、当時の認識
を考慮すれば、中宮温子・仲平の父である藤原基経が造営した
大邸宅とみてよいだろう。その堀河殿と伊勢の関係について
は、新田孝子氏が⁽²⁶⁾検証されており、簡潔に示せば、宇多天皇の
出家後、伊勢と中宮温子が、寛平九年（八九七）七月から昌泰
元年（八九八）四月まで移り住んでいた場所であつたと述べら
れた。

五節は毎年十一月に行われる行事であることから、仮に仲平
が堀河殿に住む伊勢を訪ねた際の歌となれば、寛平九年十一月
の出来事となり、春日歌合が行われる二十四年も前の事となっ
てしまい、史実と一致しない。

このことから、「せせちのころ」以下の詞書が、この歌の詠

歌事情を伝えるために、伊勢が書き記したとは思われず、後人
の手によるものだと推測される。よって、この歌の詞書は、も
ともと「あるところに」とだけ付されてあつたと考えられ、そ
れは歌合に献上したものの選外歌になつてしまった歌であるこ
とを示唆するものではなかつたかと思われる。

では、「あるところに」に続く詞書はどのような経緯で加え
られたものだろうか。西本願寺本では一〇八番歌・一〇九
番歌と詞書がない二首が並んでいる。そして定家本では、そ
の間に『拾遺集』から増補された歌が、挟み込まれているが、
一〇七番と一〇九番歌は同じ理由によって付された詞書ではな
いかと推測される。

まず初めに、一〇七番歌の詞書であるが、その中に書かれた
「せせち」という語は、初句の「やをとめ」という言葉によつ
て引き出され、「びはのおとど」をそこに書き足したのは、伊
勢が身を移した堀河殿にまで仲平がやって来た場面を、歌の内
容から創出しようとしたためではないかと思われる。

定家本一〇九番歌「みそめずは」の歌も同様で、「ふるいゑ」
と詞書にあるのは、第三句目の「ふるさと」という言葉に触発
されて導き出されたものだと考えられる。「ふるいゑ（古家）」
といえは、『伊勢集』の読者であれば、自ずと、冒頭の「ひと

住まず荒れたる宿」が想起されるだろう。このように歌物語化していこうとする過程を後続家集部分にも見出すことができる事例だといえるだろう。

このことから、定家本は、その歌のいきさつを示唆する古い詞書と、歌を利用して、伊勢の物語を新たに作り出していこうとする後人の手による新しい詞書とが混在している本であると理解できるのではないだろうか。

七、詞書「あるところに」の検討(三)

では、最後に、③の定家本三二四番歌の詞書「あるところ」に「を検討しておこう。

まずここで問題となるのは、詞書の末尾に置かれた「とか」

という語である。他系統の『伊勢集』も含め、詞書の最後が「とか」となる例は見当たらず、ここだけに出現するのは不審である。そこで、他の家集に用例を求めてみると、『元良親王集』には次のような使用例がある。

五月ばかり、はやわすれたまへる女のきこえたる^ととか
 さみだれにわがてそへつゝうへそめしきみがたのみはいま
 やはつ覽 (元良親王集・八〇)

これは、女から親王への返歌のみを収載した際の詞書である。なぜここに「とか」が用いられているのだろうか。親王の贈歌はなく、女の歌しか手元には残っていないなかったために、家集の編纂者は、恐らく親王が贈った歌に対する返歌なのだろうと、伝聞表現を用いて書かざるを得なかったと考えられる。さら

【表3】

	定家本	西本願寺本	備考
三二二	あさな／＼そでをしほるきり／＼す秋の よすがらなきあかしつる	三二一 あさな／＼そでをやしほるきり／＼すよる はすがらになきあかしつゝ	
三二四	あるところに、みかどふたりおはしまし しけるとか 日のひかりかさねてさせばむらさきのく もふたへにいまやなるらむ	(ナシ)	『夫木和歌抄』・七七・五・伊勢 詞書「家集、院のみかどいまのど二所おはしまし 時」、二句「ふたつになれば」、四句「ほしもふたつ に」
三二五	七条のきさいの宮、みかど入道したま ひでこのころ、人 人わたすことだになきをなにかもながら のはしとみのなりぬらむ	三二二 七条の後宮、みかども入道させたま ひにけるころ 人わたすことだになきをなにかもながら のはしとみのなりにけむ	『後撰集』・一一七・七条后 詞書「法皇御くしおろしたまひでこのころ」

に、『信明集』においては、

うちへいそぎまいりたるつとめて、女

いそぎけん心のうちをしらぬかなもしもゝしきに床やさだ
むる (信明集一・一〇二)

かへしあるべしとが

のように左注に用いられた「とか」の用例が見られる。これについて平野由紀子氏は『信明集』なのだから、女の歌のみでなく信明の返歌があつてしかるべき、と後人注。」と注釈され、歌の事情に関して後人が補足するような際にも「とか」は使われていることがわかる。

これらの点を踏まえて『伊勢集』の詞書を読み返してみれば、「みかどふたりおはしましけるとか」という詞書は、伊勢あるいは歌が詠まれた事情を知る者が書き記したものは思われず、後から書き足されたものであると考えてよいのではないだろうか。つまり「日のひかりかさねて」や「むらさきのくもゝふたえに」という歌の表現を契機にして、「みかどふたりおはしましける」と書きつけ、伊勢の新たなエピソードを作り出そうとした後人の手による新しい詞書だといえるだろう。

以上の事例から、「あるところに」という詞書は、後続の詞書とは次元を異にするものであることは明らかに出来たのでは

ないかと思われる。そしてそこからわかることは、この三首には、もともと「あるところに」だけが詞書として付されていたということである。また、定家本にしか現れない、この「あるところに」という詞書を持つ歌は、西本願寺本で読む限りでは、屏風歌なり歌合なりの詞書により一括され、平面的にただ並べられた歌にしか見えないのだが、定家本に抛れば、西本願寺本とは全く異なつた事情が浮き彫りにされ、新たな様相を見て取ることができると言つてよいのではないだろうか。

八、おわりに

今回は、これまでに俎上に載せられることが少なかった定家本の本文を、西本願寺本の本文とつき合わせ、その差異を検討した。中でも、定家本にだけ存在する「あるところに」という表現を含む詞書は、古い部分と新しい部分とが混在し重層的に出来あがつたものであるという状況が確認でき、定家本生成の過程を垣間見ることができた。それと同時に西本願寺本だけを読んでいては窺い知ることのできなかつた歌の成立事情を垣間見ることができた。

そのような部分はまだまだ多くが埋もれていると思われる、今後とも丹念な読みの作業を積み重ねていくことで、定家本『伊勢集』

の性格を解明していきたい。そして従来の西本願寺本による解釈だけではなく、定家本をも用いることで伊勢の歌の新たな読みの可能性を追究していきたいと思っている。

(注)

- (1) 関根慶子『中古私家集の研究』(風間書房、昭42・3)や、島田良二『平安前期私家集の研究』(桜楓社、昭43・4)など。
 (2) 現行、『伊勢集』の諸本は、『私家集大成 中古1』(明治書院、昭48・11、執筆 島田良二)の分類に従って、呼び慣らわしている。
 (3) 平野由紀子他『新日本古典文学大系28 平安私家集』(岩波書店、平6・12)、関根慶子・山下道代『私家集全 伊勢集全』(風間書房、平8・2)、高野晴代他『和歌文学大系18 小町集』(業平集/遍昭集/素性集/伊勢集/猿丸集) (明治書院、平10・10)
 (4) 岸本理恵氏によれば、定家本『伊勢集』のように、冒頭を定家が書写し、その後を書き継いだ筆跡と一致する家集はいくつもあり、中でも、天理大学附属図書館蔵『秋篠月清集』には、定家六十七歳の年にあたる、安貞二年(一一二八)と記した定家の書写奥書があるという。『国語国文』78巻17号、平19・7)
 (5) 冷泉家時雨亭叢書第六十五巻『資経本私家集1』(朝日新聞出版、平10・2)、冷泉家時雨亭叢書第六十九巻『承空本私家集上』(朝日新聞出版、平14・7)
 (6) 片桐洋一『恋に生き 歌に生き 伊勢』(新典社、昭60・8)
 (7) 妹尾好信『伊勢集』に付載されたる秀歌選をめぐって(『源氏物語の内と外』所収、風間書房、昭62・11)。また妹尾氏は

『平安朝歌物語の研究—伊勢物語篇・平中物語篇・伊勢集巻頭歌物語篇』(笠間書院、平19・11)においても定家本を用いて注釈を施されている。

(8) ↓注1。

(9) 関根慶子(↓注1)、藤岡忠美『伊勢集序説—冒頭歌覚え書き—』(『国文論叢』昭58・3)『平安朝和歌 読解と試論』(風間書房、平15・6)、片桐洋一『恋に生き 歌に生き 伊勢』(新典社、昭60・8)など。

(10) 伊東卓治『初層天井板の落書』(高田修編『醍醐寺五重塔の壁画』所収、吉川弘文館、昭34・3)
 ↓注3。

(11) ↓注6。

(12) 峯村文人『日本古典文学全集26 新古今和歌集』(小学館、昭49・3)、久保田淳『新古今和歌集全注釈四』(角川学芸出版、平24・1)
 早くは、家永三郎氏『上代倭絵全史改訂重版』(名著刊行会、平10・1)初版は昭21・10)や、玉上琢彌氏(『屏風絵と歌と物語と—源氏物語の本性(その三)—』、『源氏物語評釈別巻—源氏物語研究』所収、角川書店、昭41・3)初出は『国語国文』22巻1号、昭28・1)らによって、物語的な構成をもつ屏風であることが指摘されている。また、この屏風に

詠まれた贈答歌について、片桐氏(↓注6)は、「一夫多妻制のもとでの女の答歌の拒否パターン、つまり、恋の贈答における女歌の典型を示すことによって展開してきた」ものだと指摘され、山下道代氏『王朝歌人 伊勢』筑摩書房、平2・10)も「恋の場における返歌の読みようのお手本、という意味を持つ屏風であったかもしれない」というように、恋歌の贈答の類型パターンを指し示すがごとく作られていると推察

される。

- (15) 恋歌の贈答における女歌の問題は、先学によって多くの指摘がなされているが、例えば、鈴木日出男氏『古代和歌史論』東京大学出版会、平2・10)は、「男が相手の女に恋慕しかけるのに対して、それを受ける女が何らかの形で切り返して応ずるとするのは、男女の贈答本来の作法であった」と指摘されている。

- (16) 例えば、『伊勢物語』二四段には、男が三年ぶりに女のもとへ帰って来て、戸を開けてくれと懇願するも、女は拒絶するという話があったり、『蜻蛉日記』天曆九年の記述には、兼家が暁方道綱母のもとへやって来て門(戸)を叩くが、開けてはもらえずに帰るといふ話があったりする。

- (17) 山口博『王朝歌壇の研究―宇多醍醐朱雀朝―』(桜楓社、昭48・11)。なお、残りの②③の「あるところに」については言及がなされていない。

- (18) 片桐洋一『新日本古典後撰和歌集』(岩波書店、平2・4)

- (19) 後藤祥子『私家集注6元輔集注釈第二版』(貴重本刊行会、平12・2)

- (20) 『角川古語大辞典CD・ROM版』(角川学芸出版、平14・2)
例えば、『和泉式部集』七三三番歌にその一例がある。

また、あるやうある人に^奉るとて

心ねのほどをみするぞあやめ草くさのゆかりにひきかけね共

この用例は、『和泉式部集全釈正集篇』(笠間書院、平24・7)の解説によれば、

和泉の近親には「奉る」とまで言はなければならぬ身分の人はみないので、あるいは、小式部の縁で、藤原教

通か実成にでも贈ったのであらうか。

とあるように、例外的な扱いをされていることがわかる。

- (22) 平田喜信・徳植俊之『私家集注道信集注釈』(貴重本刊行会、平13・5)

- (23) 増田繁夫『私家集注7能宣集注釈』(貴重本刊行会、平7・10)

- (24) 本文中の表は、上段に定家本『伊勢集』の本文を、中段に西本願寺本『伊勢集』の本文を、下段に「備考」として他出等を掲げた。

- (25) 『古今和歌六帖』二二七〇番歌では、この歌の作者名を「いせ」と明記していることから、『貸之集全釈』(田中喜美春・田中恭子『私家集注9貸之集全釈』、風間書房、平9・1)では「いせれからいすれに混じたか決定的なことは判明しないが、古今六帖の時にはすでに混乱が生じていたことになる」と補説されている。

- (26) 新田孝子『大和物語の婚姻と第宅』(風間書房、平10・9)

- (27) 定家本では「やをとめの」の歌と「みそめずは」の歌との間に、「ちとせとも」といふ歌がある。この歌は『拾遺集』に伊勢の歌として採歌されたものであるが、西本願寺本にはなく、群書類従本は巻末の増補歌群の中に位置することから、島田良二氏(→注1)は「拾遺集」からの増補であると説かれた。定家本がなせこの位置にこの歌を挿入したのか、現段階では不明としか言わざるを得ない。

- (28) 平野由紀子『私家集注13信明集注釈』(貴重本刊行会、平15・5)

※定家本『伊勢集』の本文は『大和物語』(神保書4・平安諸家集) (八木書店、昭47・5)を用い、適宜、説点・濁点を施した。その他の和歌の引用は、特に注を施さない限り、私家集は『新編私家集大成CD・ROM版』から(但し、適宜、説点・濁点を施した)、それ以外は

『新編国歌大観CD・ROM版』に拠る。

(付記) 本稿は平成二十五年度和歌文学会第一一三回十二月関西例会(於大阪府立大学)での口頭発表に基づくものである。席上及び発表後、()教示いただきました諸先生方に御礼申し上げます。

(かとう ゆういち・本学大学院博士後期課程在学)